

大学新入生の過去の「いじめ・いじめられ体験」

Behavior Related to “Ijime”: Remembered by the University Students

弘前大学保健管理センター 田名場美雪
弘前大学教育学部 豊嶋 秋彦
岩手県立大学社会福祉学部 遠山 宜哉

-
- I. はじめに
 - II. 対象と方法
 - III. 結果と考察
 1. 過去のいじめ体験
 2. 過去のいじめ体験についての自由記述によるふりかえり
 - IV. まとめ
-

key words: “ijime”, retrospective approach, student counseling

I. はじめに

学校におけるいじめというテーマは裾野が広く、しかもデリケートな性質のものである。現象そのものを記述・説明しようとしたときに、第三者からは「これはいじめだ」と思えるような現象であっても、いじめの被害者は被害を否定し、加害者は加害行為を否定する。あるいは逆に、第三者には単なるじゃれ合いと思えるような行動でも、被害者には「これがいじめである」と感じられることもある。被害者、加害者、そして第三者には認識の相違を仮定できる。さらにこの第三者は、次の二通りに分けて考えることができる。つまり、いじめを面白がって見る「観衆」という層、そしていじめの発生には気づきながらもなす術もなくそれを眺めている「傍観者」という層である。いじめの数が増えたとか残酷さが増したということよりも、その構造の変化、すなわち森田・清水（1986）¹⁾の述べるような『四層構造』に目を向けることも大切である。学校におけるいじめを考えると、従来のような加害者-被害者関係のみならず、それを取り囲む「観衆」「傍観者」といった存在も考慮に入れながら重層的に捉える必要があろう。

本研究では、いじめを「自分よりも弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」と定義した上で、大学新入生に対して過去のいじめの被害・加害の体験について尋ね、加害体験と本人が考えているものと、いじめの観衆となり傍観者にとどまった経験とはどのような関係があるのかを調べることを目的とする。これまで被害者と加害者との関係でしか捉えてこなかったが、そこに「観衆」「傍観者」などの項目を加えることによって、全体の布置がどのように変わるのかを検討する。さらに、いくつかの自由記述式による質問を加えることにより、いじめの構造について探索的に検討するものである。

II. 対象と方法

全新生に対して郵送法による質問紙調査を実施した。詳細は以下のとおりである。

①対象：弘前大学の人文学部・教育学部・医学部・理工学部・農学生命科学部の平成10年度新生1216名（男子696名、女子520名）。このうち、1214名（男子695名、女子519名）から回答を得た。回収率は99.8%、有効回答率は100%でありすべてを分析の対象とした。

②調査方法：郵送法による記名式の質問紙調査である（回収も郵送で行った）。入学手続き書式等と共に送られる書類の中に保健管理センターからの『健康調査書』が含まれるが、この一部をアンケートとして使用した。

③調査時期：平成10年3月末から4月初旬にかけて実施。

なお、質問項目は選択式の質問と自由記述式の質問から構成され、選択式の回答に関する統計的解析についてはSPSSを使用した。

III. 結果と考察

1. 過去のいじめ体験

①加害者あるいは被害者体験をもつ者は約3割

まず、いじめの体験率をみとめる（図1、参照）。平成7～9年度の資料は遠山・豊嶋（1998）²⁾によるものである。調査のテーマとなる「いじめ」の定義は調査年度により一貫していないため単純比較はできない（平成7年度調査ではいじめを定義せず、平成8・9年度調査ではいじめを「複数の人が、一人または少数者に対して、繰り返して行ったもの」と定義している）。しかしながら、いずれの年度も、過半数の学生が加害者にも被害者にもなったことがない、ということは共通した傾向である。

平成10年度のみの結果に着目してみると、いじめを体験していない群が約7割、いじめの体験をもっている群が約3割である。いじめ体験有群の半数が、加害者・被害者ともに体験している。なお、男女間の分布に有意な差はみとめられなかった。

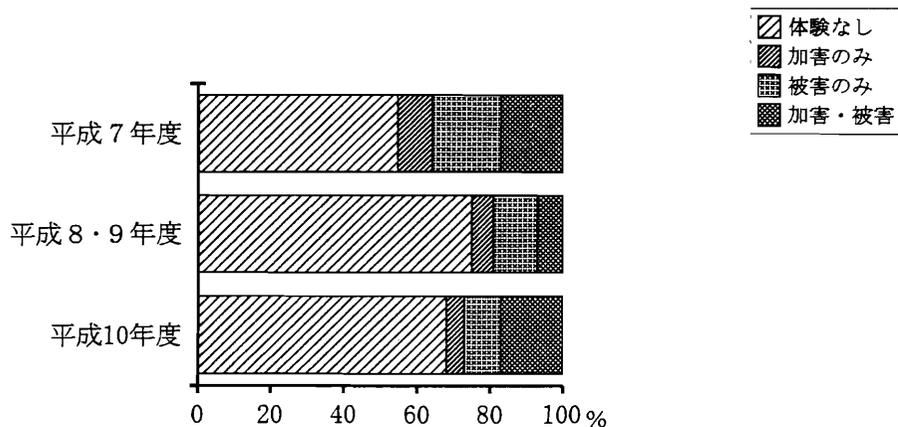


図1 いじめの体験率

②いじめに関与する時期は、小学4～6年生および中学生

次に、いじめ関連行動に、どのような役割（被害者、加害者、観衆、傍観者、仲裁者）で、どの時期に関わったのかをみてみる（図2、参照）。いずれの立場での体験も、小学校4～6年生および中学生という時期に集中している。

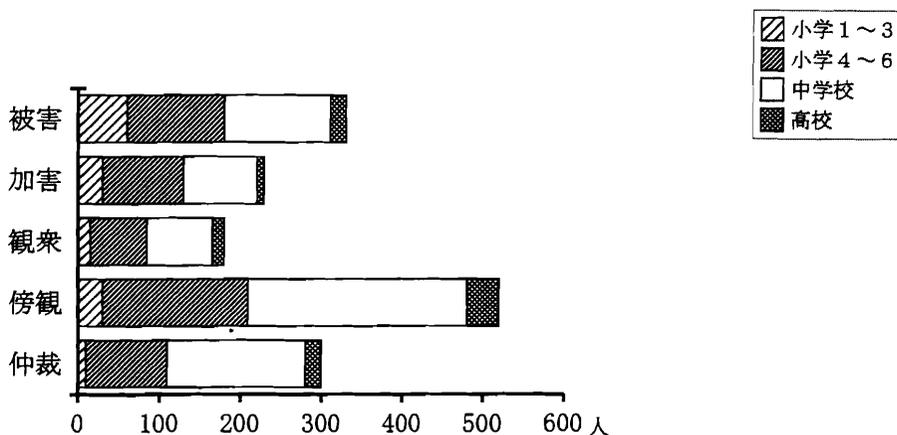


図2 いじめに関与した時期

なお、「傍観者」に限ってみれば、44%の学生がその役割を演じた体験をもっていることは、注目すべきであろう。

③いじめの内容には男女差がみられる

図3は、加害内容を奥村らの調査の結果（1987³⁾、1988a⁴⁾、1988b⁵⁾）を参考にして6つのカテゴリーに分けて調べた結果である。カイ2乗検定の結果、男子と女子との間にはその分布に差がみとめられた ($p < 0.01$)。男子の場合、「言葉の暴力」「いやがらせ」「仲間はずれ」、女子の場合「仲間はずれ」「無視」「言葉の暴力」が加害の手段として用いられている。「身体的暴力」は全体的に実数こそ少ないが、男子にみられる傾向である。なお、被害を受けた際の内容についても、これと全く同じ有意な傾向がみられた。

いじめの「加害者」「被害者」とともに、いじめの現場を構成する別の層である「観衆」「傍観者」、そしていじめをなくそうと行動する層である「仲裁者」をみてみる（図4、参照）。ここでも、上述の「加害」「被害」の内容と同様に、「観衆」「傍観者」「仲裁者」の立場として、女子では「仲間はずれ」、男子では「言葉の暴力」「いやがらせ」にかかわっている。

つまり、女子が関わってきたいじめの内容は、その立場が「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」のいずれであれ、仲間はずれや無視といった「わざと、なにもしないことによって、相手に被害を与える」という、他者との関係を一方的に切断するというスタイルをとる傾向にある。これと比較して男子の場合は、立場の如何に関わらず、「言葉の暴力」「いやがらせ」といった「わざと、なにかをすることによって、相手に被害を与える」というスタイルなのである。

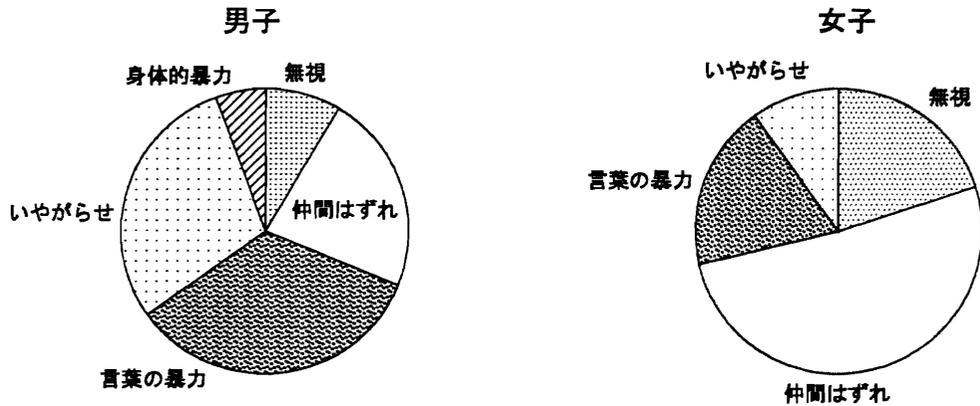


図3 加害者・被害者としてのいじめの内容

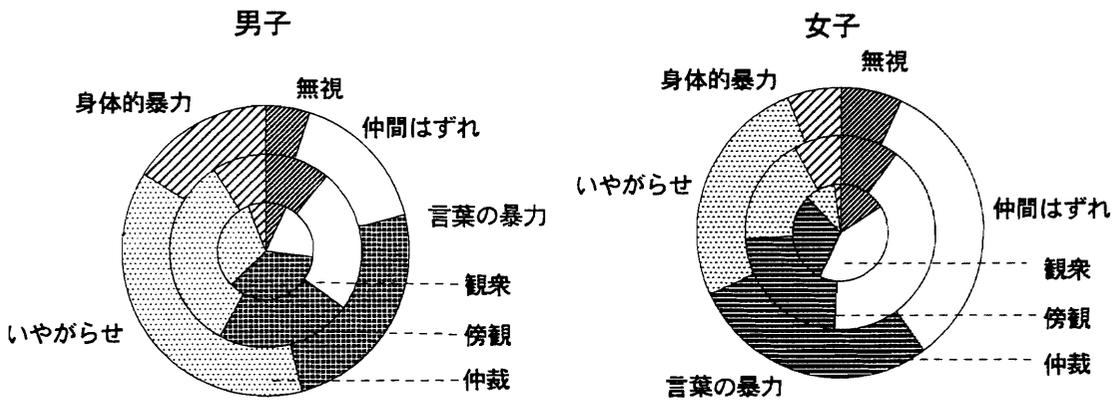


図4 観衆・傍観者・仲裁者としてのいじめの内容

2. 過去のいじめ体験についての自由記述によるふりかえり

過去のいじめ体験についての、いじめの被害にあわなかった理由・いじめ被害の消える要因について自由記述形式で回答を求めた。回答者数は961名、回答件数はのべ1138件であった。本人の態度には「タフ・マインド」が求められ、「友人の支え」が必要であり、そして行動面では「対人関係に配慮」し、仲間と比較して「普通であること」が重要であるとみなされている。

いじめを仲裁できた理由・できなかった理由についても同じく自由記述を求めたが、回答者数は970名、回答件数はのべ1020件であった（自由記述式の質問にも関わらず、先の質問と共に79%という回答率を得ることができた）。いじめを仲裁するか否かには、「自分に被害」が及ぶかどうか、

仲裁するための「有効性」をもっているとみなすかどうかの影響を与える。また、被害者・加害者と知り合いかどうか、あるいは一緒に仲裁する仲間がいるかといった、いじめの現場の登場人物が自分と（プラスの）関わりをもっているかどうかということが重要になってくる。

表1 いじめの被害にあわなかった理由、いじめ被害の悪影響が消える要因

タフ・マインド（積極的、前向き、明るい）	224
友人の支え	204
いじめがない	139
めぐまれた（まわりがいい人ばかり、みんな仲良し）	101
普通であること（目立たなかった、普通だった）	99
対人関係への配慮	71

表2 いじめの仲裁ができるか否かを左右する要因

自分への被害（次に自分がいじめられるから）	134
有効性（無理だと思った、自信があった）	71
無関心（自分には関係ない）	49
当事者が友人・知人	49
いじめは悪	37
仲裁する仲間の存在（一緒に仲裁する仲間がいた）	22

※「いじめの場面にあったことがない」が338件あった

IV. まとめ

大学生の過去のいじめ体験の概要は、以下ようになる。いじめを体験している者は約3割であり、その体験型には「加害・被害ともに」という体験型が多い。いじめを体験する時期は、小学4～6年生と中学生という時期、いわゆる思春期に集中している。対人関係を強く意識し始める時期と重なっている。いじめの内容に関して男女を比較すると、女子では仲間はずれや無視といった関係切断型の内容となっており、男子の場合は言葉による暴力やいやがらせといった接触型の内容となっている。また、身体的暴力という手段は全体的にとられにくい傾向にあるが、そのとられにくさは女子に顕著であった。

いじめが発生したとき、児童・生徒は「加害者」「被害者」、いじめをおもしろがって見ている「観衆」、いじめを見て見ぬふりをしている「傍観者」に分かれる。自分への被害を回避したり、自分のもっている資源（有効性、仲間）不足が理由で、あるいは自分とは無関係を位置づけることによっていじめを止める「仲裁者」が少なく、傍観者層が多数できると予測される。

文 献

- 1) 森田洋司・清水賢二：いじめ-教室の病い, p25, 金子書房, 東京, 1986
- 2) 遠山宜哉・豊嶋秋彦：大新入生がふりかえてみた“いじめ”の体験. 弘前大学 保健管理研センター概要, 19, 13-32, 1998
- 3) 奥村武久・河原 啓・長井 勇・楠田康子・木村純子・野田恵子・鈴木英子・林 光代：大学生の過去の「いじめられ体験」に関する調査. 第25回全国大学保健管理研究集会 報告書, 229-233, 1987
- 4) 奥村武久・河原 啓・長井 勇・林 光代・鈴木英子・野田恵子・木村純子・楠田康子・橋本雅治：大学生の過去の「いじめられ体験」に関する調査-第2報-. 神戸大学保健管理研センター紀要, 1, 5-13, 1988a
- 5) 奥村武久・川口 侃・河原 啓・長井 勇：大学生の過去の「いじめられ体験」に関する調査-神戸商船大学の場合-. 神戸大学保健管理研センター紀要, 1, 15-22, 1988b